

と 経営 健康

第6回

生き残りへ 智略縦横 真田三代

講談師 一龍斎貞花

慶長十六年、七十歳の徳川家康は二条城において八年ぶりに秀頼と対面。

十九歳と立派に成長した秀頼を見て孫の千姫を嫁がせているとはいえず、この秀頼が先頭に立ったなら、福島正則はじめ豊臣恩顧の大名が秀頼につく恐れあり、これはなんとかしなければと考えます。

病の床にいた真田昌幸は

「家康は必ず豊臣打倒に立ち上がるに違いない、太閤が築いた難攻不落の城、よいか家康に勝つ秘策がある」

枕元の幸村と孫の大助に、秘策を授けると、慶長十六年六月四日、失意の中六十五歳で波乱に富んだ生涯を終えたのでございます。

生き残るため策略を駆使したものの十二年間九度山での蟄居生活、燃えるものを失い落ち込んでしまったのでし

よう。これは先頭に立って活躍した人間に間にあつたこと、どう気持ちを持ち続けるかが大切です。ご留意下さい。

黒衣の宰相といわれる金地院崇伝が、豊臣家が再建した方広寺の鐘の銘文、国家安康、君臣豊楽に目をつけ、家と康を分断し、豊臣を榮えさせることを願ったものと難癖をつけ、遂に大坂の陣の火ぶたが切つて落とされます。

大坂方は、天下数多の浪人に声をかけ続々大坂へ入城。手ぐすね引いておりました幸村は、伴大助、猿飛佐助をはじめ家来を従え監視の目をくぐつて大坂へ入城。二度まで徳川を撃退した真田の入城に、城内は氣勢が上がりま

す。諸將を集めて軍議が進むうち、
「我が父昌幸が残した秘策がござる」
「才是非承ろう」

「されば、秀頼公に大坂城よりご出馬頂き天王寺に布陣」

「なにを馬鹿な、秀頼様が大坂城を出るなど左様なこと、淀のお方様がお許しになると思ふか」

秀頼側近の大野治長が反対するも、長宗我部盛親、毛利勝永、後藤又兵衛等が、「ともかく話を伺おう」

「天王寺からは、大和の国へ奈良街道が続いており、敵は我等が奈良を伺うものと思ふは必定、徳川の目をそちらへ向けさせ、そのすきに某と毛利殿が夜陰にまぎれ京街道を攻めのぼり、徳川の拠点の一つ伏見城を奪い、京の都に火を放ち宇治、瀬田に布陣致し徳川勢を喰い止める。秀頼様が先頭に立つて頂けば日和見の西国大名はもとより、豊臣恩顧の者は秀頼様に弓引くこと出来ず我等に味方するは必定、勝つべき

策でござる」

盛親はじめ浪人衆賛成したが、
「左様な危ない橋を渡らずとも、難攻不落のこの城で守りに徹したがよい」
雇われ者達従うより他なく、幸村の出撃策は退けられて籠城と決定。

真田丸築城

「大坂城にも一つだけ弱点がある。徳川の大軍を迎え撃つには、南側の守りを固める必要がある」と、平野口に出丸を築いた。世に名高い真田丸です。大坂城外に出丸を設け、近付こうとする敵を横合いから攻撃しようというも。門を守り出撃出来る丸馬出しも設ける。城の欠点を補つて鉄壁の守備態勢を整えます。

真田丸の規模は、縦横百間約百八十

メートル、一万坪、ほぼ四角い形で出丸の周囲に土塀を建て廻し一間ごとに鉄砲狭間を設け火繩銃を配置、空堀を掘り、堀の底に二重の柵を巡らし侵入を防ぐ、大坂城外堀の外に建てたつまり出城です。

場所は湿地帯、うしろは海と上田城に似た立地条件です。

昌幸の家来だった多くは、真田家を継いだ徳川方の信之に仕えたが、農業に従事したり浪々の生活を送っていた者も少なくなく、幸村大坂入城を聞くや、「上田合戦の再現だ」と駆つけて参ります。しかし大坂方は金で集めた浪人軍団。トップの秀頼は、合戦の経験全く無くちやほやされたばんぼん。

大野治長は、乳兄弟というだけで戦いの能力なく、大名は長宗我部盛親と毛利勝永の二人だけ、後藤又兵衛、薄田隼人は豪勇ではあるが軍団を指揮する力量はない。

参謀に幸村と思いきや、兄の信之が徳川方とあって内通するのではないかと疑う者もあるという有様。上田城主の伴というので五千の兵を預けられ、盛親、勝永と共に大坂三人衆と呼ばれ

ておりました。

大坂冬の陣

慶長十九年十一月 東軍は二十万の大軍をもって押し寄せた。

先陣前田勢、真田丸の空堀近くまで攻め寄せてきた。

櫓の上に仁王立ちの幸村、

「今だ、撃てーっ」

一人では持てず三人掛りの砲身の長さ二メートル、射程距離三百メートルの大型銃。命令一下ダダダー、前田勢雨あられと銃弾浴びせられ総崩れ。

「前田に遅れをとるな」と井伊勢が次々と押し寄せる。これを引き付けてはダーダ、次の部隊が空堀へ入ったが銃撃しない。「弾が尽きたぞ、今だ登れ、登れ」大勢が土塁にとりついて登りはじめた。

「ヨシ、引きつけて撃てっ」

再び銃弾、弓矢、石つぶてを狙いすましたように撃ち放つ。土塁から落ちる者、逃げんとする者、そこへ後から後から兵が押し寄せ、押されて空堀へ落ちる者ありという有様、ここぞと幸

村

「大助、行けーっ」

緋緘の鎧も初々しく大助五百の兵を率いて出撃。浮足立つ敵中になだれ込み、縦横に敵をなぎ倒し意気揚々と引き揚げ、徳川の精鋭部隊を向こうに廻して大勝利。たった一日の戦いで徳川方一万五千の兵が討ち死。上田城勝利の再現です。

その後も挑むものの、真田丸がどうしても邪魔、一月月の膠着状態。

そこで徳川方、幸村に

「信濃一国を与えるがどうじゃ」と誘いをかけるも

「某、誇りがございます。おのが心の誠を貫きとうございます」と、きつぱりと断ります。

「わしは、七十三のこの年令まで戦わねばならんとは。秀忠はあてにならん、信康が生きておれば」と、悔やんだが、信長からの命令で切腹させている。

すると淀君や、大野らと対立し徳川についた豊臣家の家老だった片桐且元が、「これをご覧下さりませ」と、大坂城の絵図面を。

「これはよい、大砲で本丸を狙い撃ち

じゃ、淀殿の部屋を狙わせよ」

大砲の届く天守までわずか七百メートルまで押し出し間断なくドカン、ドカンと大砲をぶつ放し、天守二階の淀君の居間に撃ち込むや、

「和議などあり得ぬ」と、強情の淀君もにわかにな弱気になり徳川と和睦。

家康の考えは、堀さえ埋めてしまえば力で落とせると、本丸の内堀のみを残し、そのほかの堀は総て埋め立てることが条件。

「堀を埋め立てられては、裸同然ひとたまりもない」と、幸村たちが反対したが、

「浪人達は、戦がなければ解雇される恐れもあり、だから戦いたいのであろう。もつと厳しい条件を突きつけられると思っていたが堀の埋め立てだけ、ここは休戦して高齢の家康の死を待てばよい」と、治長たちに押し切られてしまった。

二の丸、三の丸の櫓・門・塀から、真田丸もことごとく打ちこわし、本丸の堀も埋め立てられ丸裸。

大企業没落の要因を見るが如き大坂落城、もう一話おつきあい下さい。